

春登『萬葉集名物考』と本草学

和田義一

一

春登は江戸時代後期、時宗の僧侶にして国学者であつた。その著書『萬葉用字格』は文化十四年（一八一七）に上梓され、近時影印本も出版されて、国語・国文学界では身近な一書となっている。しかし、『萬葉集名物考』は国文学の領域や自然科学の領域の博物学の世界でもあまり知られていないようである。国文学の世界では、二、三の万葉研究史²に記載があるほか、佐佐木信綱『萬葉集事典』に簡単な記述がある。同書の典籍篇「考証」の部、「博物」の項に「集中の品物を考証せるもの、上巻草部九十三種、中巻木部五十八種、下巻鳥獸蟲魚七十五種を載す。文政六年九月の自序あり、本書起稿の次第をいへり」とある。管見の及ぶ範囲では、『萬葉集名物考』に解説を施している代表的なものである。備考欄に「東京都府

中大國魂神社所蔵」とあるから同神社蔵本を閲覧していたらしい。一方、博物学の分野では白井光太郎『日本博物学年表（温故堂蔵板 明治二十四年初版）³』に書名が見られるが、上野益三『日本博物学史』¹には書名が見られない。上野益三は『日本博物学年表』の復刻版に「解題」を書いているくらいだから、『萬葉集名物考』については知っていたはずである。同種の万葉博物学書、『萬葉集中禽獸蟲魚草木考』（小林義兄）、『萬葉動植考』（伊藤多羅）、『萬葉品類鈔』（荒木田嗣興）などについては記載しているのに、どうして本書を『日本博物学史』に記載しなかったのだろうか。春登の著書をさほど重視しなかったからであらうか。『萬葉集名物考』という題名からして、万葉集中の品物について考証したものであることは明らかであり、本草学、博物学とは余り関係がないとみなしたとは到底思えない。ともあれ日本博物学史研究の集大成ともいふべき著

書に記載されていないことの影響は大きいだろう。

ところで、「名物」という語がわが国の古典に出てくるのは伊藤仁斎の『童子問』（宝永四年（一七〇七）刊）が最初と言われる。直ちにこれに就けば「大抵六經を學ぶ者は、專其の名物度数訓詁異同を研究するを以事と爲す」（巻の下第三章）とある。日本古典文学大系本の頭注は「名物」を「植物や動物や器物などの名まえが実際にどういふものであるかを研究する学問」と注している。仁斎は六經を學ぶ者の多くがもっぱらその名物・度数・訓詁・異同を研究するのを以て事としている状況を「非なり。」と言っている。しかし「名物」の研究そのものを否定しているのではない。仁斎の息伊藤東涯は『名物六帖』（最初の五冊）を享保十二年（一七二七）に出版している。

伊藤東涯の『名物六帖』に続いて江村如圭の『詩經名物辨解』（享保十六年（一七三二）の刊行がある。本書は巻一・二草、巻三木、巻四羽、巻五毛、巻六鱗、巻七蟲という構成で、詩經の名物を解説したものである。江村如圭は摂津尼ヶ崎の青山侯に藩儒として仕えた漢学者で、松岡恕庵（玄達）に本草學を學び、また、稻生若水の門弟ともいわれる。これより以前、元禄十一年（一六九八）には中国古典の名物學の書である陸璣『毛詩艸木鳥獸蟲魚疏』の和刻本が出版されているから、如圭の『詩經名物辨解』はそれにならっ

たものかもしれない。如圭の『名物辨解』の出版を機に、中国古典の名物學書の著述・出版は以後次第に盛んになる。いわゆる名物學が勃興してくる。

仁斎・東涯の流れをくむ文献考証學派の人々による名物學に対し、慶長年間に中国より渡來した『本草綱目』の流れをくむ、本草學者による名物學が一方にあった。林羅山の『多識編』がその最初のものである。これは『新刊多識編』（一―五巻、二冊）として寛永八年（一六三一）に刊行された。以後本草學の興隆はめざましいものがあり、やがて貝原篤信（益軒）『大和本草』（巻一―一六）が宝永六年（一七〇九）に出版され、日本人の手になる本草學書が始めて出現する。藥物學としての本草學に博物學的視点を導入している点で、この書は画期的なものと言えよう。上野益三は日本の博物學の進むべき方向は『大和本草』によって示されたと述べているが、それも過言ではないだろう。江戸時代の本草學者は益軒を含めて『本草綱目』を範とし、『本草綱目』に所載の品物名（いわゆる漢名）に同定できる和産の品物がどれかをきめるのに苦心した。つまり、本草學者は名と実物とを弁明する作業を必ず経過したから、彼らの仕事は名物學的側面を有していた。

ところで、名物學が対象とする範囲はいかなるものであろうか。島田勇雄によると、東涯の『名物六帖』は未完ではあったが、天文・

地理・度量・数目・人品・宮室・器財・飲膳・人事・身体・動物・植物の諸項目を包含する予定であつたらしい。考証学派の人たちによる名物学はこれが最も広範囲で、多くは論語にひかされて鳥獣虫魚草木等の動植物に限定されているという⁹⁾。その点で『本草綱目』を手本とする本草学よりも対象範囲が限定されている。

さて、春登の『萬葉集名物考』は草部(上巻)、木部(中巻)、鳥・獸・蟲・魚部(下巻)の六部、三巻で構成されている。従つて、形式的には考証学派の人たちによる名物学という体裁になっている。しかし、記述内容は貝原益軒や小野蘭山の説を多く引用し、本草学者による博物学書の傾向を多く持っている。万葉集中の動植物を同定するのに、本草学の知識をどのように応用しているかを考察するのが本稿の目的である。

二

春登の生涯については不明な点が多い。『国書人名辞典』(第二巻)及び弟子鳳山著「春登上人小伝」¹⁾(天保十一年十二月跋)によりその概略を述べる。春登は安永二年(一七七三)八月二十八日に生まれ、天保七年(一八三六)十月十八日に没した。享年六十四歳である。諱は輪丈(倫丈)・春登、号は花(華)水庵・大麓斎・興徳院

と称した。諡号は桂光院其阿上人。俗姓は山本と称し、新羅三郎義光二男山本遠江守義定の後裔と言われる。甲斐城下に生まれ、安永八年(一七七九)、七歳の時、甲斐吉田(富士吉田市)の西念寺の春丈和尚について出家し、天明四年(一七八四)(十二歳)までここで修行した。この間、吉田浅間神社の小佐野和泉(本居宣長門人)について国学を学んだ。十三歳の天明五年、本山の藤沢山に登り、諦如上人に師事したが、寛政元年(一七八九)、春丈の入寂により西念寺監寺となり、同六年、西念寺の住職となった。文化元年(一八〇四)(三十二歳)には江戸に遊学した。江戸滞在は同四年九月までの約三年間である。この期間に、加藤千蔭・村田春海・清水浜臣・小山田与清・狩谷掖斎・山崎美成らと交遊した。

文化十年(一八一三)には武州関戸(東京都多摩市関戸)の延命寺の住職となり、文政九年(一八二六)に、富士吉田の花水庵に移住するまではここで過ごした。途中一時期、他寺を住持した期間を除いて、通算約一〇年間である。関戸は寒村であり、延命寺はまた地藏院とも号する貧弱な庵寺であつたが、春登はここを好んだと言われる。弟子の鳳山は、「春登小人小伝」で「時人以為有契沖阿闍梨之風」(返り点は私に付す)と述べているが、いかにも円珠庵の契沖を偲ばせる清貧の生活であつたらしい。晩年は富士吉田の花水庵に隠棲した。

著書のうち、刊行されたのは『萬葉用字格』（文化十四年）、『假字音便撮要』（文化十四年）、『五十音摘要』（文政十二年）の三書で、他に一枚摺の図表（折本）『和歌革運略図』（文政八年）がある。その他の多くは写本で残されている。鳳山は「如其餘所訂正」万代集萬葉名物考と則弟子等録而傳之」と述べている。先にも述べたように『萬葉用字格』は現存する版本も多く、比較的著名であるが、『萬葉集名物考』は刊行されずに終り、写本の数も少ない。次に『萬葉集名物考』の写本について述べてみよう。

『萬葉集名物考』の写本は管見では次の三種類である。

1、東京大学図書館蔵南葵文庫旧蔵本（E 31・一一二）（上・中・下三卷、三冊）

2、国立国会図書館蔵白井文庫本（特一・四五二）（上・中卷、一冊）

3、東京都府中市大國魂神社蔵武蔵総社文庫本（上・中・下三卷、三冊）

右の三書の他に、お茶の水図書館竹相園文庫に写本がある。しかし、これは「国書稿本刊行会原稿」用箋に書写されたもので、写本というよりも、出版のために翻字された稿本というべきもので、それも結局は出版されなかったようである。佐佐木信綱は『萬葉集事典』で既述のごとく3に言及しているから、あるいは3を書写した

ものかもしれない。上巻三七枚（序文・目録を含む）、中巻二五枚、下巻二四枚に書写されている。この稿本を除く、1・2・3の三種の写本について以下に概略を述べる。

1は表紙左端に外題「萬葉集名物考 上（中・下）」と墨書がある。縦二七・五センチ横一七・八センチ、四つ目袋綴。内題は「萬葉名物考 桑門春登撰」とある。紙数は上巻が序文三枚、目録二枚、本文五四枚、中巻が目録一枚、本文三八枚、下巻が目録一枚、本文三四枚である。本文は一面一行、一行の字数一六字で書かれている。各巻の第一枚目巻頭に、上から順に「南葵文庫」「陽春盧記」「朝田家藏書」の印章が捺されている。「陽春盧」は国学者小中村清矩（文政四年（一八二二）生、明治二十八年（一八九五）没）の号である。清矩は明治維新後『古事類苑』の編纂にも参画した人であるが、幕末の安政四年（一八五七）三十六歳の時、師本居内遠の推挙により紀州藩に仕え、古学館の教授、ついで頭取となったこともある。文久三年（一八六三）には幕府和歌所の講師を勤め、維新後は東京大学で教鞭をとったが、明治二十三年九月には貴族院勅選議員にも選ばれている。清矩が「朝田家藏書」（国学者岸本由豆流の蔵書）の本書を何らかの経路で入手し、所蔵していたが、のち南葵文庫に納められたのであろう。

ところで、1の下巻末には美濃判、四周單辺の罫紙が四枚、二つ

折りになつてはさみ込まれている。一枚目には「春登上人小伝」と題する文章（漢文）があり、その文末に「天保十一年庚子十二月弟子延命寺鳳山謹誌」の年記がある。二、三枚目には「花水吟草^{春登上人歌集}」序 写本武蔵府中猿渡氏所蔵」と題する文章（和文）があり、その末尾には「天保十一年冬十二月武さしの国衛六所宮人藤原盛章」という年記がある。四枚目には

右萬葉名物考三巻以三小中村清矩藏本一寫更以三

花水吟草所載上人小傳一附二卷末一

明治十年十二月 櫛園主人

という跋があり、更に別筆で

これは三田葆光ぬしに此本を借したるに

返す時添ておくれるものなり

小中村清矩

と付記がある。清矩の付記、櫛園主人の跋文から判断すると、櫛園主人こと三田葆光（文政八年（一八二五）生、明治四十年（一九〇七）没）は小中村清矩所蔵の1を明治十年に書写した。その際に「花水吟草」（春登上人歌集）所載の「上人小伝」（弟子鳳山が天保十一年に記したものを）を巻末に附した。そして返却する時「上人小伝」と「花水吟草序」（猿渡盛章が天保十一年に記したものとを）を野紙に書写し、それを添えて清矩に返却してきたというのである。

「花水吟草」については櫛園主人が「写本武蔵府中猿渡氏所蔵」

と注記しているからは、その写本を猿渡氏が所蔵していたことは確実である。しかし、「萬葉集名物考」については何も触れていない。もし、明治十年ごろに「名物考」を猿渡氏が所蔵していたのであれば、猿渡氏と親交のあったらしい櫛園主人はわざわざ清矩に借りずとも、猿渡氏に借りればよかったはずである。この当時武蔵総社文庫主の猿渡氏がすでに3を所蔵していたか否か不明である。いや所蔵していなかったのではなかろうか。このことについては後で再び触れる。

2は上・中巻合冊の一冊本である。表紙は縦二六・三センチ、横一八・六センチ。表紙左端の題簽は「萬葉集名物考 上中 下欠」とある。四つ目袋綴である。内題は「万葉名物考 巻上（中）桑門春登撰」とある。上・中巻とも巻頭一枚目に「白井氏藏書」の印章が捺してある。上巻は序文三枚、目録二枚、本文五四枚。本文は一面一行、一行一六字に書かれている。中巻は目録一枚、本文三八枚。本文の行数、字数は上巻と同じである。1・2・3には本文上部の余白に頭注の形式で加筆がなされている。1・2の頭注は共通の内容が記載されているが、1にあつて2では脱落しているもの（上巻、「菖蒲」・「之婆」・「容花」の項）もある。他は全く1と同じである。2は1の影写本と考えられる。2で脱落している頭注は、

2を書写した後に、1に新たに加筆されたか、2を書写する際に脱落したかのどちらかである。後者の可能性の方が大きいと思う。2は南葵文庫が東大図書館の所管に帰してからの写本であろう。下巻を欠くのは、下巻は動物篇（鳥・獸・蟲・魚）であつて、植物学者の白井光太郎は下巻書写の必要性を認めなかつたのであろうか。それとも、下巻の写本もあつたが散佚してしまつたのであろうか。

3は四つ目袋綴の三冊本である。表紙は縦二三・六センチ、横一六・五センチである。表紙左端の題簽はそれぞれ「萬葉集名物考^{草部上}」、「萬葉集名物考^{鳥獸下}」とある。各巻頭一枚目に「武蔵総社文庫」の印章がある。内題は「万葉名物考上（中・下）桑門春登撰」とある。上巻は序文三枚、目録二枚、本文五四枚、一面二一行、一行一六字で1と全く同じである。中・下巻も各巻の枚数、一面の行数、一行の字数など1と同じである。3の下巻末には1の下巻末の附録に見える「上人小伝」は記されていない。従つて、これは檀園主人が書写した本ではない。

1と2の頭注を比較してみると、既述のように、2には、1にある頭注が三個所（「菖蒲」「之婆」「容花」）欠落している。他の頭注は全く1と同じである。これに対して、3の頭注は2に欠落している三個所を含めてすべて1と同様に書写されている。しかも、3の上巻には1・2にない頭注が四個所（「思草」（二個所）・「容花」・

「蓮」の項）加筆されている。そのうち3の「蓮」の項の頭注は1では加筆の記号（△印）だけが本文中に挿入されていて、頭注が脱落しているから、1の書写者は頭注を書き込む予定であつたらしい。1のもとの本には恐らく頭注があつたものと思われる。この「蓮」の項を除く他の三個所の頭注は3独自のものである。

また、1には書写者の誤脱と考えられる個所がある。下巻鳥部、「鵲^{オス}」の項の最後の行が脱落している。こゝは「夫木集」の西行の歌を引用している個所である。3によれば「ル曙ノ空」と補うことができる。1と3の間には直接の書写関係はなく、1と3は自筆本もしくは自筆本の写本をそれぞれ別個に書写したものではないかと推測される。

ところで、右に挙げた3独自の頭注のうち「思草」の項の頭注には

手枝^{テヅ}發蒙云敗醬万葉集ニオモヒ草ト云

又古今集和名抄ニ女郎花ト云

とある。「手枝發蒙」というのは書名であらうが、これは「千種發蒙」の誤記または誤字ではなからうか。「手枝發蒙」という書名は和漢の本草書の中に見出し得ない。「千種發蒙」なら伊勢の本草学者・医者である鎌井正寿（松石）（文化十二年（一八一五）生、明治二十四年（一八九一）没）が自著『本草正譌』（慶応元年（一八

六五〕成立）三三巻中より草木および虫類一〇〇〇種を選び彩色を施した図鑑集（慶応四年成立）である。（『本草正謄』・『千種発蒙』は文部省のち帝室博物館へ納められたが関東大震災で烏有に帰したという。）³とすれば、この頭注は春登によるものではなく別人による慶応四年（明治元年）以降の加筆ということになる。³は明治以降も加筆されていた本、またはその写本である。

前野貞男は『万葉動物歌論考』⁴で、井上通泰『萬葉集雜攷』・『萬葉集追攷』の所説により、³を原本としている。しかし、井上通泰の所説は徳島市の春登研究者武岡善次郎の調査に基づくものであり、武岡善次郎の調査を紹介したものであって、自身の調査に基づくものではない。そして、井上は武岡の調査に基づいて「未刊著書の殆全部は東京府府中町官幣小社大國魂神社の宮司猿渡氏の家に蔵して居る（昭和七年八月四日）」⁶と記した。

明治十一年当時猿渡氏が³を所有していなかったのではないかという推測は先述した。³が自筆原本なら、春登と親交があり、春登の歌集『花水吟草』の写本の所持者であり、また、その序文を書いた猿渡盛章（寛政二年（一七九〇）生、文久三年（一八六三）没）以来猿渡氏に伝来していてもよい筈である。ところが、盛章の息容盛（文化八年（一八一）生、明治十七年（一八八四）没）が生存していた明治十二年当時猿渡氏は『萬葉集名物考』を所有していな

かったらしいのである。とすれば³を自筆原本とすることには疑問がある。

ただし、¹に比して³の方がより自筆原本に近いのではないかと思われる。それは、¹の誤脱が³では正しく書写されている場合が多いからである。下巻鳥部「鵠」の文末が¹で脱落していることは先述した。その他下巻鳥部「菅鳥」の項で¹は「菅ハ菅ノ誤歟」とあるのを³は「菅ハ管ノ誤歟」と正しく書写している。また、漢文の引用文で返り点が脱落している箇所などが、³では正確に附されていることも多い。

三

以下、¹をテキストとして春登の品物同定の方法について述べてみたい。

本書の成立を文政六年（一八二三）とするのは自序に「文政六年九月」の年記があるからである。小林義兄の『萬葉集禽獸蟲魚草木考』¹の一応の成立は自序によれば文化十二年（一八一五）であるからそれより八年後である。本書執筆の動機を春登の自序により述べてみると次のようになろう。この天地の間の目に見、耳で聞いたことを、むかしの前例・故実（書物）によって推量し、今の現実に即

して見聞きせず、大体の見当で推測するのは誤りも少なくない、また、萬葉集に詠まれている品物を見聞きしても（他国の書物によって）他国の品物として理解しているのはこの国に生まれたものとして腹立たしいことである、そこで、此集（萬葉集）の草木鳥獸の類を一つ一つ取り出して現実の品物の何に相当するかを考証した、という。萬葉集の頃も今の時代も、都と田舎とは存在するものと存在しないものとがあつて、同定が困難であるとも述べている。六月の初めからかかつて九月に終わつたというから約三ヶ月かつたことになる。

上巻草部は目録には「通計九三種」とあるが「麦」が重出しているので、実質は九二種である。中巻木部は五八種、下巻は鳥部三八種、獸部九種、蟲部一〇種、魚部一八種、計七五種である。本文の記述は最初に品物名を見出し語として掲載し、ついで原歌を引用している。原歌は所載巻数を併記し、用例が多いものは所載巻と品物名だけを挙げ、引用は省略している。また、古事記・日本書記に用例がある場合はその部分も引用している。見出し語としては萬葉集の表記をそのまま使用するよりは和名抄所載の品物名を使用している場合が多い。和名抄の記述は漢字の品物名をあげ、それに対応する和名を萬葉仮名で記すという方法をとっている。春登の使用した萬葉集のテキストは寛永版本と考えられるが、これにはカナの訓が

ついている。和名抄の和名と萬葉集のカナ附訓が一致する場合、和名抄記載の漢字の品物名を見出し語として掲載するのが春登の方法である。和名抄に和名が記載されていない品物については萬葉集記載の表記を見出し語としてあげると、少数であるが本草書類に記載されている見出し語をそのまま見出し語として採用している場合がある。

例えば「クソカヅラ」（上巻草部）は萬葉集に「屎葛^{クソカヅラ}」とあり、和名抄に「弁色立成云細子草和名久曾加豆良」とあり、見出し語を「細子草^{コソカヅラ}」とし、また「ヒカゲ」（上巻草部）は萬葉集に「日影^{ヒカゲ}」とあり、和名抄に「蘿日本紀私記云蘿比加介」とあるのにより「蘿^{ヒカゲ}」を見出し語としてあげる。萬葉集では「蘿」を「コケ」と訓じているが、春登は「和名抄苔和名古介又松蘿和名万豆乃古介トアレハ古ヘハ蘿ノ字ヲ訓リトミユ」と述べながらも、「コケ」については「苔」を見出し語としてあげている。このように和名抄の見出し語を多く採用している。

これに対して「知智乃實^{チチノミ}」「加頭乃木^{カズノキ}」「之伎美^{シキミ}」などは萬葉集の表記をそのまま見出し語とした例である。また、萬葉集の「菜^ナ」「安佐奈^{アサナ}」「蔓菁^{マンセイ}」に対して「松^{マツ}」（上巻草部）を見出し語としたのは「大和本草」によるものであり、萬葉の「兒手柏^{コノテカシハ}」「古乃豆加之波^{コノメカシハ}」に対して「側栢^{コノメカシハ}」（中巻木部）を見出し語としたのは「大和本

「草」や「本草記聞」によるものであろう。² 万葉の「余母疑」は和名抄に「蓬和名與毛木」とあるにもかかわらず「艾」(上巻草部)を見出し語としたのはこれも「大和本草」によるものであろう。

和名抄の見出し語を批判している場合もある。万葉集の「和良妣」が和名抄には「薇蕨和名和良比」とあるのを「按ニ毛詩採其蕨」、採其薇トアレバニ物タル事明ナリ和名抄ニ字ヲ一物トスルハ非也」と述べ、春登は「蕨」(上巻草部)を見出し語としている。そして「薇ハ俗ニ云フゼンマイナリ」とも述べて、「蕨」と「薇」を別物とした。大和本草や本草記聞なども「蕨」と「薇」を別のものとしているから、春登は恐らく本草書などを参考にしていたのであろう。

ところで、春登は「凡テ吾邦ノ古人ハ字ヲバ心々ニ當タレバ其物ヲ考ヘテ字ニハカ、ハルベカラズ」(上巻草部「松」)とも述べている。このことは『萬葉用字格』(序)でも「元從字波假乃目標ル手奈何刀毛可書遺物西雖有」と書いていることも共通する考え方である。「文字當云物者吾日出国庭輕島明宮御時韓國從所傳來豆此間面移四用志」とも書いているように文字は「唐国」渡来のもので、仮りのものであるという文字観が根本にあった。しかし、この文字観は春登独自のものというより、春登が尊崇する本居宣長にも既に見られるものである。春登は『古事記傳』二十五之巻を『名物考』(中巻木部)でも引用して「凡テ鳥獸草木ナトノ名ノ漢字ハ古ヘハ

書ニ依テ心々ニ當タレハ異ナル事多シ漢國ニテスラ彼此タカヒニマキレテサタカナラヌガ多ケバ皇國ニテハマシテ然アルベキコトナリ」とも書いている。宣長は同巻で「漢字は假りの物なれば、深くさだすべきにもあらず」と言い切っている。春登が萬葉集表記の品物名を一つ一つ和名抄の和名と対照させているのはそれだけ仮名表記に信を置いていたということである。そして、記紀の仮名表記や訓注にも和名抄同様に信を置いていた。

さて、本文叙述に際して春登は多くの和漢の書籍を引用している。和名抄の引用は圧倒的に多いが、これは古活字本系統の二十巻本『倭名類聚抄』を使用したと考えられる。狩谷棧斎とも親交があったらしいが、『箋注倭名類聚抄』(成稿文政十年(一八二七))はまだ出版されていない頃だから、流布本の二十巻本を使用したであろう。他の萬葉博物学書では和名抄と並んで多く使用されている『新撰字鏡』を春登は殆ど使っていない。

萬葉集注釈関係の参考書としては国学者関係のものが多く、賀茂真淵が最も多く、ついで加藤千蔭、本居宣長が多い。仙覚、契沖の名も見える。わが国の古典としては古事記・日本書記の引用が圧倒的に多いが、夫木抄、古今六帖、八雲御抄などもよく使われている。古今集などの勅撰集や個人の家集からの直接引用は比較的少ない。延喜式からの引用もある。(附表(三)参照)

真淵の『冠辭考』や『萬葉考』からの引用が多いのは当然としても、宣長の『古事記傳』からの引用が長文にわたってしばしば引用されているのが目立つ。ところで、宣長の萬葉集研究の具体的様相については明治・大正はさておき昭和以降も石井庄司⁴や小泉丹⁵・大久保正らによって指摘されて来た。石井庄司は『記傳』に現れた萬葉関係の記述を総計二七五〇項目と計算した。『記傳』以外では『萬葉集問目』（一〇八五項）、『萬葉集問聞抄』（九九〇項）、『詞瓊緒』（七〇〇項）、『略解』収載（五八〇項）、『玉の小琴』（二二〇項）、同『追考』（一二五二項）、『萬葉集問答』（二二五項）、『玉勝間』（一四五項）、計四〇七七項目と計算し、そのうち記傳との共通項目数を四二〇項としている。この四二〇項の共通項目によって記傳以外の説（記傳の記述の補足・修正）をも見ることができると述べている。また、小泉丹は『玉の小琴』の項目数を二三五項と計算し、そのうち植物品目数四項とし、『萬葉集問目』は総項目一一〇八項とし、植物品目は三一項としている。小泉は宣長が植物品目に深い注意を拂って周到な考察をしていることを述べている。

春登は自説を展開するのに宣長の説をしばしば引用している。項目をあげると次のようである。

（上巻）草部―尾花 菅 萩 玉葛 木綿 栲 冬薯蕷葛 思草
久君美良 蘿（一〇項目）

（中巻）木部―檜 橘 杉 楓 楓 秋柏 歷木（七項目）
（下巻）鳥部―鶴 千鳥。獸部―鹿。蟲部―蜻蛉。魚部―鯛 鯉魚（六項目）

合計二三項目となる。しかし、右のうち草部の「思草」は単に「玉勝間卷十三ノ説考フベシ」とあるだけで引用文はない。（後の加筆かもしれない。）従って、実際は二二項目である。このうち草部の「尾花」だけが『萬葉集玉の小琴』（一之巻）からの引用である。「玉の小琴」の成立は自序によれば安永八年（一七七九）で、刊行は春登没後の天保九年（一八三八）であるから、春登は『玉の小琴』の写本を入手していたのであろう。他の二二項目はすべて『古事記傳』からの引用である。

春登の文字観が宣長の影響を受けていることは先述した。春登は「古ハ物産ノ学今ノ如ククハシカラネハ和漢トモニ字ヲ當テ違ヘタル事多カリ」（上巻・「尾花」）とも述べている。これなども宣長の影響であろう。宣長は記傳で「漢字」は「仮りの物」であるからあってにならないことをくり返し述べている。二十五之巻以外でも、例えば「漢名はいかにまれ、かかはるべきにあらず」（二十四之巻）、「凡て魚鳥草木などの名の漢字は古へは人の心々に當て書きつれば、彼れ此れと異なること多ければ、漢名に依ては定めがたし」（三十一之巻）と述べている。そして、春登は自説を補強するために記傳

を引用し、また、記傳を引用することで自説に代えている。

春登は宣長と同じように真淵の所説をしばしば引用しているが、真淵説には時には批判的である。例えば、下巻鳥部で『冠辭考』を引用した後に「按ニ此説モサル事ナガラ能ク思フニ驚ハ深山ニ多ク住テ里近キ神社ナトニ住モノトモ思ハレズ」(「真鳥」と批判して、物産家の説をもつてその傍証としている。また、宣長が記傳四十二之巻で、契沖の「萩」と「榛」とは別であるという所説を承けて「萬葉なる榛を波岐とは訓ふべきに非ず、凡て萬葉による榛と芽子とは歌のさま異にして、よく分かれたり」と述べている個所を春登はそのまま引用し、同時に『萬葉考別記』をも引用して、暗に真淵説を批判している。宣長は記傳で「師の萬葉考別記に、榛をも花咲芽子と一なりと云れたるは、誤なり」と明言しているが、春登はここまでは引用していない。

宣長は「漢字は假りの物なれば、深くさだすべきにもあらず」(二十五之巻)に関連して、「後世に本草と云書をむねと學ぶ輩の云々説など、精きに似たれど、なほ定めがたきこと多し」(二十五之巻)と述べて「本草と云書をむねと學ぶ輩」を痛烈に批判している。しかし、宣長自身は『玉勝間』で「から國の書をも、いとまのひまには、ずるぶんに見るぞよき、漢籍も見ざれば、其外國のふりのあしき事もしられず、又古書はみな漢文もて書たれば、かの國ぶりの

文もしらでは、學問もことゆきがたければ也」(一の巻「もろこしぶみをもよむべき事」と述べているように、内外の漢籍に広く目を通していたようだし、医師を目ざして勉強した時代もあったくらいだから、本草書にも多くの関心を寄せていた。記傳で「本草てふ書に(李時珍云)蛆ハ蠅之子也、凡物敗臭則生之」(六之巻)と『本草綱目』を引用している。他にも「本草に……」と『本草綱目』を引用している個所(十七之巻など)はあるし、「或人は、阿志加は本草綱目に海類とある物なりと云り」(十七之巻)と述べて『本草綱目』の名前をはっきりあげている個所もある。それに続けて「或書には山東志曰、海鹽……と云り」と本草書を引用しているが、この個所は貝原益軒の『大和本草』(巻十六)よりの引用である。

記傳に貝原益軒(篤信)の名前が出てくることは春登も注目していた。記傳十三之巻では「貝原氏が云、楓は其葉まことに白楊に似て……と云り」と『大和本草』を引用しているが、春登はその個所をそのまま「古事記傳十三云貝原力云楓ハ其葉マコトニ……」(中巻木部「楓」と引用している。また、記傳二十五之巻では「或説に、昔の橘は今の蜜柑なり、今世に、別に橘とある物には非ずと云」と『大和本草』の説を引用しているが、春登は「宣長云」として、「或説」の前後とともに記傳の本文を長く引用している

〔中巻木部「橘」〕。宣長の言う「或説」とは『大和本草』の説であることを春登は恐らく知っていたであろう。それは「貝原氏モ橘ハ今ノミカムナリ其花ヲ花ヲ花ト云トイヘリ」と「貝原氏」の名前をあげてもう一度引用を繰り返しているからである。同じ個所で宣長は「薬の橘皮にも、昔より蜜柑の皮を用ゐるなり」とも書いているが、宣長の本草学に対する関心が伺えよう。

宣長はこのように本草学にかなり関心を抱いていたようだが、「或説に」という形で引用している個所が多いことから知られるようにその態度は極めて控え目である。それは「がくもんして道をしらむとならば、まづ漢意をきよくのぞきさるべし、から意の清くのぞこらぬほどは、いかに古書をよみても考へても、古への意はしりがたく、古へのころをしらでは、道はしりがたきわざになむ有ける」「からぶみにいへるおもむきは、皆かの國人のこちたきさかしら心もて、いつはりかざりたる事のみ多ければ、真心にあらず」〔玉勝間〕一の巻〔學問して道をしる事〕・（からころ）とする宣長の立場からは当然の態度であらう。

これに対して春登の本草学に対する態度は宣長よりはるかに積極的である。諸説を紹介してのち自説を述べるにあたっては「按二」：という形をとることが多い。「按」がない場合もあるが、最終的結論を出すにあたり、多かれ少なかれ本草書の説を拠り所としている

ことが多い。例えば、上巻草部で、和名抄の「蘇敬本草注」を紹介してから、「按二西土ニハ家園ニ植ル故ニ家葛トモ云リ 此ニモ古田圃ニ植ラルニ因テ田葛ノ字ヲ書ルニヤ」〔葛〕とか「用葉須知」や『大和本草』の説を紹介してのち「按二海邊ニ生シテ其花白ケレハ濱木綿ノ名ハ負セシナルヘシ」〔濱木綿〕などと記している。本草書の名を書かず、単に物産家とのみ書いている場合もある。

「物産家延齡草ニ當ルト云リ此外所見ナシ」〔土針〕などがその例である。さらに、本草書名もなく、「物産家」とも書かずして本草書の引用で文をしめくくっている個所もある。「形状ハ葉黃芩ニ似テ太柔ニ薄シ高二三尺又柳葉ニ似テ大ニシテ互生ス夏月葉間花ヲ放ク黃白^{（マユ）}紛紅アリト云ヘリ」〔紫草〕、「按二此レ水草也葉ノ莖^{（マユ）}豐レテ海老ノ足ノ如シ是ニ實アリ食用ニスト云ヘリ」〔菱〕）などである。

春登は殆どの項目において本草学書を引用し、本草学的見地からその品目の形状について詳細に記述している。色や形、大小について述べ、植物については花実、動物については棲息地にまで言及している。大部分が本草学書からの引用によるとはいえ、動植物の生息に大いに関心を持ち、その生息を明らかにしようという情熱にあふれている。その意味で文献による考証の域を脱していると言えよう。先にも触れたように、「此集（万葉集）のところに詠める種々の

ものなど見聞きして異国^{あたりに}のもの^{ものごと}の如く思えるはこの大御国に生まれながらいともく腹立たしき事」(自序)であるから、草木鳥獸の一つ一つについてわが国の何に相当するかを考証するのが本書執筆の目的であった。春登の視点は現実に存在する動植物に注がれていた。自然科学の領域に一步踏み込んでいた。『萬葉集名物考』はすぐれて博物学書であると言えよう。

本草学書関係で最も引用回数が多いのは小野蘭山(享保十四年へ一二二九)生、文化七年(一八一〇)没)の講義録『本草記聞』である。京都在住の本草学者蘭山は寛政十一年(一七九九)江戸に下り、文化七年江戸で没する。蘭山の東下とともに江戸の本草学界は活況を呈したと言われる。蘭山の代表的著作『本草綱目啓蒙』の初版本(享和三年(一八〇三)〜文化三年(一八〇六)刊行)はすでに出版されていたが、私家版であり、蘭山と交渉のない人には入手しがたかった。弟子の源九龍が蘭山の『本草綱目』の講義の筆記を校正・編集した『本草記聞』(寛政三年序)(一五巻)の写本が市中に出廻っていて一般的に入手し易かったようである。

『本草記聞』について引用回数が多いのは李時珍『本草綱目』、貝原篤信『大和本草』などである。その他の本草学関係書としては『秘伝花鏡』、『詩経名物辨解』、『用薬須知』、『花彙』、『救荒野譜』、『草花譜』、『群芳譜』、などがあげられ、人名としては稻生若水、松

岡玄達などが挙げられている。単に「物産家」とのみ記している場合もある。

春登が参考書としてあげている和漢の書籍は六〇余種に達する。書籍の流通が今日ほどではなかった当時としてはかなりの量である。春登はこれらの書籍をどこで入手または閲覧したのであろうか。

春登が江戸遊学時代に親しく交遊した人々の一人に小山田与清(天明三年(一七八三)生、弘化四年(一八四七)没)がいる。与清との交遊は春登の江戸滞在が終わってのちも続いていたらしい。春登の随筆に『藁襲』(写本、六冊)(武蔵総社文庫蔵)というのがあり、その第三編(文政六年〜九年ごろ成立)の序文を与清が書いているし、また、『五十音摘要』(文政十二年刊)の序文も与清が書いているからである。

小山田与清は蔵書家として知られ、その書庫(擁書倉)には蔵書二万巻を蔵したとも伝えられる。春登はこれを利用する便宜が与えられていたのではないだろうか。春登が栗村の関戸の延命寺を好んだのはそこが江戸と吉田と藤沢を結ぶ三角形の中心地点で、しかも、吉田・藤沢より江戸に近かったからだと言われる。江戸近くを好んだのはやはり江戸が学芸文化の中心であったからである。その他に、近く武蔵府中には親交深かった神道学者偏無為依田貞鎮の彼岸山文庫、同じく府中大国魂神社の神主猿渡盛章の武蔵総社文庫などもある。

り、これらを利用する便宜も与えられていたであらう。こうした背景があつて春登の学問は成立したと言えよう。

春登は外出する時、蘭山の講義録の自家製の抄本を持ち歩いたとも伝えられている。⁹⁾ 自然観察には熱心であつたようだ。内外の典籍を通読し、一方で江戸時代の最先端の科学である本草学の知識を身につけた観察力でもって自然の品物——動植物を検証したことであらう。

四

寛永版本は植物の「小竹」をすべて「ササ」と訓じている。春登は「小竹」を「ササ」ト「シノ」に訓み分けている。巻二・一三三番「小竹之葉」、巻一〇・一三三六番「湯小竹」、巻一四・三三八二番「佐左葉」は版本のままに「ササ」と訓み、巻七・一三四九「小竹」、巻二一・二七七四「浅小竹原」、巻二二・三〇九三「小竹」、巻一三・三三三七「百小竹」は「シヌ」と訓んでいる。後者は現代の諸本（塙書房版など）も「シノ」（篠）と訓んでる。春登は当時すでに「ササ（笹）」と「シノ（篠）」を区別していた。春登は「シヌ」と「ササ」は同類異種であると説明している。そして項目を分けて記述している。目録も別に挙げている。春登の書に先行する小

林義兄の『禽獸蟲魚草木考』では「ササ」と「シノ」を区別せず、同一項目として扱っている。春登は真淵・宣長の説を承けて別立てとした。義兄より一步進んでいると言えよう。同様のことは「ハギ」と「ハリ」についても言える。寛永版本は「榛」字をすべて「ハギ」と訓じている。「萩」と「榛」は別物であることを指摘したのは契沖であり、宣長は契沖説を継承している。真淵が「榛」を「ハギ」と訓んでいることを批判した宣長のことについては先にも触れた。契沖・宣長説をうけて春登は「榛」を木部に分類している。これに対して義兄は「茅子（萩）」と「榛」を混同し、同一項目（草部）で「ハギ」として扱っている。宣長の説を多くとり入れている春登の説は江戸時代の同種の書の中でも一步進んだものであつた。

ただ、下巻の動物の部では、和名抄と本草書の引用に終始し、春登独自の考察（按）が見られない。また、分類においても「蟲」部で「日晚」と「蟬」を別だてにし、「河津」を「蟲」部に入れるなど、義兄よりも後退であると言えよう。義兄の本領がどちらかと言えば動物学方面にあつたのに比し、春登の本領が植物学方面にあつたのは、彼が僧侶であつたことと関係するかもしれない。それが国学者の系譜をひく春登の限界であつたとも言えよう。

最後に附表について触れておきたい。附表（一）は『萬葉集名物考』（旧南葵文庫本）の上・中・下巻の冒頭にある目録を、私に通

し番号を付して配列したものである。本文記載箇所は丁数で示し、各丁の裏面の場合のみ「ウ」で示した。備考欄には小林義兄『萬葉集中禽獸蟲魚草木考』の目録の通し番号を記載して両者を対照する場合の便宜とした。内容が同じでも漢字表記やかな表記（呼称）が異なる場合にはそれをも記載した。欄が空白になっているものは該当する品目がないものである。附表（二）は引用書目一覧である。算用数字は引用回数である。本文上部の欄外に頭注として記載してあるものについては集計することを省略した。別人の手による書写過程での加筆の可能性があると考えられるものもあつたからである。人名であげられているものは、そのまま人名で示した。人名・書名両方であげられているものはどちらか回数の多い方をあげた。ただし、賀茂真淵は『冠辞考』が最も多かったが、『萬葉考』の場合もあり、人名で統一し、宣長の場合も『古事記傳』が最も多く、『萬葉集玉の小琴』、『玉勝間』が各一回あつたが、人名で統一した。契沖についても『勢語臆断』が一回あり、他は『萬葉代匠記』（初稿本）を引用していたが人名で統一した。なお、他書の引用文中にある書名・人名は集計に入れなかった。また、他書の引用文であることを明示していなくても、明らかに他の文献からのもの（所謂孫引き）とわかるものは集計しなかった。

〔注〕

一

（1）春登上人著（鈴木浩一解説）『万葉用字格』（和泉書院 昭和五十九年初版）がある。

（2）井上通泰『萬葉集雜攷』（明治書院 昭和七年）「春登上人」、「再春登上人に就いて」、「三たび春登上人について」及び同著者『萬葉集追攷』（岩波書店 昭和十三年）「四たび春登上人に就いて」。

前野貞男『万葉動物歌論考』（清和堂書店 昭和四十三年）「序章」。

萬葉集講座別卷『萬葉集事典』（有精堂 昭和五十年）「研究年表」・中西進編『萬葉集事典』（講談社文庫 一九九三年）「研究史年表」など参照。

（3）白井光太郎（上野益三解題）『日本博物学年表』（科学書院 昭和五十五年復刻版）参照。

（4）上野益三『日本博物学史』（平凡社 昭和四十八年）参照。

（5）日本古典文学大系97『近世思想家文集』（岩波書店 昭和四十一年）「童子問」（清水茂校注）の「巻の下」参照。訓説文のみ引用。

（6）『国書人名辞典』第一卷（岩波書店 一九九三年）参照。

(7) (4) に同じ。

(8) 講座国語史3『語彙史』(大修館 昭和四十三年) 第五章「近代の語彙Ⅱ」(島田勇雄)の「学術用語」参照。

二

(1) 延命寺鳳山「春登上人小伝」(天保十一年十二月跋)は東京大学図書館蔵(旧南葵文庫蔵)『萬葉集名物考』の巻末附録及び武蔵総社文庫蔵の写本を参照。

(2) 『日本古典文学大辞典』(岩波書店 一九八四年)の第二巻参照。

(3) 松島博「近世伊勢における本草学者の研究」(講談社 昭和四十九年)第九章の「鎌井松石」及び前掲書上野益三『日本博物学史』「年表」の「二八六八年」の項参照。

(4) 前掲書前野貞男『万葉動物歌論考』参照。

(5) 前掲書井上通泰『萬葉集雜攷』・『萬葉集追攷』参照。

(6) 前掲書井上通泰『萬葉集雜攷』参照。

三

(1) 小林義兄『萬葉集禽獸蟲魚草木考』の成立については拙論『萬葉集禽獸蟲魚草木考』の成立について(『国文学』第七十六号(関西大学国文学会 平成九年九月発行)参照。

(2) 「兒手柏」は万葉植物中の所謂疑問植物十数種の一つで、

仙覚・契沖以来諸説が行われて来た。これについては長田貞雄

「万葉植物兒手柏考」(『五味智英先生還暦記念上代文学論叢』桜楓社 昭和四十三年)所収)がくわしい。

(3) 『本居宣長全集』第十一巻(筑摩書房 昭和四十四年)「古事記傳二十五之巻」参照。

(4) 石井庄司「記傳を中心として見たる宣長の萬葉学に就いて」(生田耕一『萬葉釋文索引記傳之部』(『文献書院 昭和四年』の後記)参照。

(5) 小泉丹『日本科学史私攷』(岩波書店 昭和十八年)第三編第一章「萬葉集植物研究史傳」参照。

(6) 大久保正『本居宣長の萬葉学』(大八洲出版昭和二十二年)、同著者『万葉集の諸相』第七章第二節「万葉研究史」参照。

(7) 『本居宣長全集』第一巻(筑摩書房 昭和四十三年)「玉勝間」参照。

(8) 高野修「春登上人『花水吟草』」(『藤沢市史研究』第十二号『藤沢市文書館 昭和五十四年三月』所収)参照。

(9) 猿渡盛厚『武蔵府中物語』(武蔵府中大国魂神社 昭和三十八年)下巻「花水庵春登上人」参照。

(わだ よしかず/関西大学院生)

附表(二)

春登『萬葉集名物考』(旧南葵文庫本) 目録

No	項	目	丁数	備考
16	木綿	ユフ	14・ウ	37
15	山振	ヤマフキ	14	78
14	都多	ツタ	13	21
13	海松	ミル	12・ウ	61
12	小竹	サ、	12	
11	玉葛	タマカツラ	11	14
10	萩	ハキ	8・ウ	84
9	箒	ス、	8	88 水鷹 <small>みづたか</small>
8	五味子	サネカツラ	7	12
7	藻	モ	6・ウ	64
6	紫草	ムラサキ	5・ウ	76
5	葦	アシ	4・ウ	6
4	須々伎	ス、キ	3・ウ	51
3	萱	カヤ	2・ウ	39 草 <small>か</small> ・加夜
2	尾花	ヲハナ	1・ウ	52
1	菰	ナ	1	3

36	鴨頭草	ツキクサ	28	55
35	麻附素	アサ	27	2
34	萩	ヲキ	26・ウ	36
33	濱木綿	ハマユフ	26	37 ゆふ
32	葛	クス	25・ウ	20
31	菖蒲	アヤメ	25	9
30	瞿麥	ナテシコ	23・ウ	58
29	水葱	ナギ	23	57
28	粟	アハ	22・ウ	7
27	韓藍附紅藍	カラアキ	21・ウ	27 からあゐ (くれなる)
26	名乗藻	ナノリソ	21	59
25	萱草	ワスレクサ	20・ウ	81
24	淺茅附芽花	アサチ	20	4
23	藤	フチ	19・ウ	木部 22
22	栲	タク	19	木部 47
21	山菅	ヤマスケ	18・ウ	
20	菅	スケ	17・ウ	50
19	苔	コケ	17・ウ	44 蘿 <small>ろ</small>
18	薦	コモ	16・ウ	74
17	薺蒿	オハキ	16	29 うはぎ

56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37
藤袴	須美禮	藤	尊	垣津幡	王孫	百合	海藻	冬薯蕷葛	小竹	石網	之婆	垣衣	瓜	味狭藍	牟具良	葉根綾	花勝見	女郎花	山橋
フチハカマ	スミレ	ワラヒ	ヌナハ	カキツハタ	ツチハリ(土針)	ユリ	メ	トコロツラ	シヌ	イハツナ	シハ	シノフクサ	ウリ	アチサキ	ムクラ	ハネカツラ	ハナカツミ	ヲミナヘシ	ヤマタチハナ
38	37・ウ	37・ウ	37	36・ウ	36・ウ	36	35・ウ	34	33・ウ	33・ウ	33	32・ウ	32	31・ウ	31	30	29・ウ	28・ウ	28・ウ
72	85	82	67	33	56	79	62	13 まさきつら	92	22	48	47	30	87	75		35	86	木部 14

76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57
多波美蔓	久君美良	莞	伊波為蔓	九久多知	朮	濱都豆良	蓮	似兒草	蓼	繩乘	稗	子太草	知草	容花	思草	葛	恵具	山藍	朝貌
タハミツラ	ク、ミラ	アホイ	イハキツラ	ク、タチ	ラケラ	ハマツ、ラ	ハチス	ニコクサ	タテ	ナハノリ	ヒエ	シタクサ	シリクサ	カホハナ	オモヒクサ	サキクサ	エグ	ヤマアキ	アサカオ
47・ウ	47・ウ	47	46・ウ	46・ウ	46	45	45	44・ウ	44	43・ウ	43	42・ウ	42・ウ	41・ウ	41	40	39・ウ	39・ウ	38・ウ
18	43	8 葵 <small>あひる</small>	11	42	28 うけら	17	68	65	54	60	41	46	49	25	32	45 三枝 <small>さんえだ</small>	70	26	5

			93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77
			麥	芹子	葦附	大豆	母々余草	蘿	堅香子	艾	菖	菱	細子草	葵	地膚	蒜	宇毛	麥	根都古艸
			(73と重出)	セリ	アシツキ	マメ	モ、ヨクサ	ヒカケ	カタカコ	ヨモキ	チサ	ヒシ	クソカツラ	アフヒ(74c.f)	ハ、キ	ヒル	ウモ	ムギ(93にも)	ネツコクサ
			54	53・ウ	53・ウ	53・ウ	53	52・ウ	51・ウ	51・ウ	50・ウ	50・ウ	50	50	49・ウ	49	49	48・ウ	48
				53	63	73	77	24やましたひかげ44蘿 _リ	34	80	94やまちさ	69	19	8葵 _{おほな}		71	89	99	66

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	(巻中・木部)
室木	梅	柘	賢木	臣木	櫻	槻	茵	杉	椎	馬酔木	橘 付橙	椿	樗	真木	松	榛	榿	梓	
ムロノキ	ウメ	ツミ	サカキ	オミノキ	サクラ	ツキ	ツ、シ	スキ	シヒ	アシヒ	タチハナ	ツハキ	ツカ	マキ	マツ	ハリ	カシ	アツサ	
18・ウ	18	17・ウ	16・ウ	15・ウ	14	13・ウ	13	12・ウ	11・ウ	10	8・ウ	7・ウ	6	5	4・ウ	3	1・ウ	1	
23	19	46	44	45	2	40	草部 91	17	8	20	12・ 13	10	18	7	1	草部 84	30	37	

39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
梨	黄楊	母蘇	蝦手	唐棣花	合歡木	檀	橡	桑	山治左	楓	桃	宇乃花	檜	柳	樺	楸	栗	棟	柴
ナシ	ツケ	ハ、ツ	カヘテ (29.c.f)	ハネス	ネフリノキ	マユミ	ツルハミ	クハ	ヤマチサ (草部85.c.f)	カツラ	モモ	ウノハナ	ヒ	ヤナキ	カニハ	ヒサキ	クリ	アフチ	シハ
29	29	28	27・ウ	26・ウ	26	25・ウ	24・ウ	24・ウ	24	22・ウ	22	21・ウ	21	21	20・ウ	20	19・ウ	19・ウ	19
25	36	29	16	3	21	48	5		草部94		15	9	6 檜原 <small>ひのはら</small>	11	2 櫻皮 <small>かには</small>	4	31	43	52 五柴 <small>いつしほ</small>

	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40
	黄葉	竹	之伎美	都万麻	保寶葉	柏	可頭乃木	知智乃實	李	櫟	榎	側柏	棗	枳	由豆流波	歷木	奈良	壹師	秋柏
	モミチ	タケ	シキミ	ツママ	ホ、カシハ	カヘ (47.c.f)	カツノキ	チ、ノミ	スモモ	イチヒ	エ	コノテカシハ	ナツメ	カラタチ	ユツルハ	クヌキ (23.c.f)	ナラ	イチシ	アキカシハ
	37・ウ	37・ウ	37	37	36・ウ	36	35・ウ	34・ウ	34	34	33・ウ	33・ウ	33	33	32・ウ	32	31・ウ	31	29・ウ
		草部93	39		35	34	42	49	33		27	26	24		32	4 若歷木 <small>わかしき</small>	41	草部90	

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	(巻 下・鳥 部)
鶇鶇	雉	容鳥	鶇鶇	千鳥	安治	高部	鶇	大鳥	鶇	鴻鴈	霍公鳥	呼兒鳥	鶇	鶇	鶇	鶇鶇	鶇	鶇	
ニホ	キ、シ	カオ(ホ)トリ	ミサコ	チトリ	アチ	タカヘ	ラシ	オホトリ	ウツラ	カリ	ホトトキス	ヨフコトリ	カモメ	シキ	ヌエ	ウ	カモ	タツ	
9・ウ	9	8・ウ	8	7・ウ	7・ウ	7	6・ウ	6・ウ	6	5・ウ	5	4・ウ	4	4	3	2・ウ	2	1	
9	17		11	16	10	5	6	35	15	24	14	12	1	31	2	3	4	13	

	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
	都鳥	鴉子鳥	比婆理	燕	鷹	鶇鶇	鶇	狹野津鳥	菅鳥	此米	伊加流我	鶇	志長鳥 <small>附也左可利</small>	山鳥 <small>附庭都鳥</small>	可鶇	真鳥	烏	秋沙	鶇
	ミヤコトリ	アトリ	ヒハリ	ツハメ	タカ	ワシ	サキ	サヌツトリ(18c.f)	スカトリ	シメ	イカルカ	モス	シナカトリ	ヤマトリ	カケ	マトリ	カラス	アキサ	ウクヒス
	17・ウ	17	16・ウ	16・ウ	16	16	15・ウ	15・ウ	15	15	14・ウ	14	13	13	12・ウ	11・ウ	11	11	10
	33	36	34	32	30	25	18	17きざし	28管鳥 <small>ツバメ</small>	29	27	26	20	23	22		21	8	19

9	8	7	6	5	4	3	2	1	(蟲部)	9	8	7	6	5	4	3	2	1	(獸部)
蛭	養蚕	日晚	須輕	蟋蟀	蜘蛛	蠅	河津	蜻蛉		狐	兎	熊	牛	犬	鼯鼠	虎	馬 附駒	鹿	
ホタル	カフコ	ヒクラシ	スカル	コホロキ	クモ	ハヘ	カハツ	アキツ		キツネ	ウサキ	クマ	ウシ	イヌ	ムササヒ	トラ	ウマ	カシカ	
26・ウ	26・ウ	26	25・ウ	25	25	24・ウ	24	23・ウ		23	22・ウ	22・ウ	22	21・ウ	21・ウ	21	20・ウ	19	
7	6	3	4	5	2	10	魚部 20	9		9	8	7	11	6	4	10	1	2・3	

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	(魚部)	10
打背貝	磯貝	忘貝	小嬴子	美奈	蜆	鰻	亀	蟹	鮫龍	武奈伎	水魚	鰹魚	鯛	鮓	鮓	鮓	鰻		蟬
ウツセカヒ	イソカヒ	ワスレカヒ	シタタミ	ミナ	シシミ	アハヒ	カメ	カニ	ミツチ	ムナキ	ヒヲ	カツラ	タイ	フナ	シヒ	アユ	ススキ		セミ(7c.f)
34	34	33・ウ	33	32	32	31・ウ	31	31	30・ウ	30・ウ	30	29・ウ	28・ウ	28・ウ	28	27・ウ	27・ウ		27
14		19	15	13	16	17・18	12	蟲部 8	11	9	8	5	1	6	3	7	2		3

附表（二）

『萬葉集名物考』（旧南葵文庫本）引用書目一覧

書名・人名	上巻	中巻	下巻	計
《辞書・事典》				
和名抄	69	53	63	185
和訓栞	5	3	1	9
新撰字鏡	1			1
藻塩草	1			1
通雅	1			1
正字通	1			1
字書		1		1
《国学関係および万葉注釈》				
賀茂真淵	11	10	11	32
萬葉集略解	15	9	4	28
本居宣長	10	7	6	23
契沖	1	1	2	4
仙覚抄		2	1	3
上田秋成			1	1
成人の万葉注		1		1

書名・人名	上巻	中巻	下巻	計
《本草学関係》				
本草記聞	9	21	17	47
本草綱目	16	6	5	27
大和本草	11	7	2	20
秘伝花鏡	2	13	5	20
物産家	7	4	5	16
詩経名物弁解	1	2	1	4
用藥須知	1		2	3
花彙		2		2
松岡玄達		1	1	2
稻生若水	1			1
救荒野譜	1			1
草花譜	1			1
群芳譜	1			1
《漢文学》				
詩ノ朱註	4	2	3	9
詩経	5	1	1	7

書名・人名	上巻	中巻	下巻	計
無名抄	1			1
古事談	1			1
俊頼口伝	1			1
願注密勘	1			1
徒然草			1	1
源氏物語	1			1
散木集	1			1
堀川百首		1		1
拾遺集		1		1
曾丹集	2			2
新撰萬葉集	3			3
伊勢物語	3		2	5
古今集	5	1		6
八雲御抄	2	1	6	9
古今六帖	11	5	6	22
夫木集(抄)	9	11	6	26
古事記	18	19	20	57
日本書紀	21	24	29	74
〈日本古典文学〉				

書名・人名	上巻	中巻	下巻	計
〈歴 史〉				
延喜式(祝詞を含む)	12	3	2	17
古語拾遺	3			3
類聚国史	1			1
貞観儀式	1			1
続日本紀	1			1
三代実録	1			1
今鑑	1			1
元享釈書		1		1
〈考証・随筆〉				
舜水朱氏談綺	1		2	3
榊巷談苑	1			1
相沢伴主		1		1
その他(不明)	4	1		5